

東北支部宮城地域会 みやぎボイス

## 地域の建築家と 復興・まちづくりの プラットフォーム

東北支部 宮城地域会 (JIA 宮城)

みやぎボイス  
連絡協議会代表



渡邊 宏 手島浩之 櫻井一弥 安田直民 佐伯裕武 阿部元希

東日本大震災から7年半が過ぎました。福島県浜通りの浪江町、双葉町、大熊町を除いて、当時を知る人、現場を訪れて被害状況を知った人以外、被災の痕跡に気づくことが少なくなりました。一方、すべての被災地で暮らしと生業の現場に入り込むと、一人ひとりの深い記憶と葛藤を知ります。

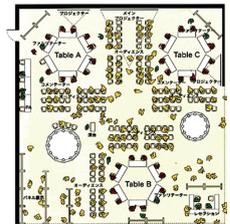
絶えず自然災害が起きています。カタチを変えながら新たな「被災地と被災者」が生まれています。



「みやぎボイス2013」  
会場風景  
(会場：せんだいメディアテーク、オープンスクエア)

に精通する立場の異なる者同士が、知見や情報を共有することによって、関係者の能力を相乗的に活かし、困難な局面の打開につなげ、さらにその日頃の「関係」が地域との持続的な「協働」さらには「信頼」を育み、「孤立からの脱却」につながる、と考えました。

プラットフォーム構築と経験・知見の共有・継承と協働から、シンポジウムのデザインが問われました。登壇者がステージに、オーディエンスが客席で拝聴するカタチではなく、関係者と市民が一堂に会し、一度に複数のテーマに向き合うこと、一人ひとりの経験・意見を考えた結果、3つのラウンドテーブルで同時進行のシンポジウムが生まれました。それを引き出したのが「せんだいメディアテーク」でした。3つのテーブルで同時に進行するスタイルに、最初は登壇者もオーディエンスも戸惑っていましたが、次第に隣のテーブルの熱気を感じながら討議に集中、そこから発せられた声は発言者自身の声として共有されていき、「みやぎボイス」の特徴となっていきました。企画の過程でニューヨークの“Village Voice”が話題になり、ジャンル横断的で既成メディアとは違うその情報誌にあやかって「みやぎボイス」と名付けられました。



「みやぎボイス」レイアウト図

### みやぎボイス誕生

震災直後からすべての人がそれぞれの現場で感じていたように、私たちJIAの仲間も被災地で活動するたびに「地域の建築家の孤立」を深く感じていました。

2012年秋、JIA東北支部では復興シンポジウム「つながるボランティア」「震災復興と専門家の連携」を開催しました。建築まちづくりの専門家と実務者が中心でしたが、それまでの1年半の「孤立」からは当然の流れでした。

これをきっかけに「地域経営の視点と活動」とそれに関わる一人ひとりとの「連携」を強く感じたJIA宮城の仲間が集まり、地域の建築家として何ができるのかを議論し、「建築を越えて」「それぞれの孤立からの脱却」「みんなで現場を知る」「復興の姿とプロセスの共有」を問いながら、「連携と協働」「経験と知見の共有と継承」を目指した“場”の構築を考え始めました。

震災直後から地域の建築家として何ができるか？ 復興計画や支援の提案を行いました。ほとんど実現しませんでした。その時痛感したのは“日頃から顔の見える関係”の大切さでした。その自問の中から、地域のまちづくりに携わる関係者が集うプラットフォームで、地域固有の問題

### 地域とずっと一緒に考える

第1回は2013年4月、発案して3ヵ月での開催でした。テーマは「地域とずっといっしょに考える復興まちづくり」。このテーマに地域の建築家の覚悟を込めました。1日目は、JIA宮城が高台移転やまちづくり委員会支援で活動している被災地石巻市北上の皆さんを中心に、「なりわい」「すまい・高台・土地利用」「医療・福祉・教育」をテーマに課題を“深掘り”し、2日目はその論点を受け、被災地で活動する行政、学識者、弁護士、建築まちづくり専門家、ジャーナリストが“広く”「すまい」「まちづくり」「協働」について意見交換を行いました。被災2年後の混乱期でしたが、プラットフォームに多くの方が賛同、JIAの芦原太郎会長(当時)をはじめ、全国から支援と参加をいただきました。

2014年は災害公営住宅の整備を視点に「復興住宅のこえ—住まいの再建から見る宮城の復興」を、2015年には新たな土地と住まいでの暮らしの始まりに合わせて「復興で橋渡しするもの」を開催しました。

震災から5年目となった2016年は中間総括と位置づけ、「これまでの復興とこれからの社会」をテーマに、復興全般を振り返り、暮らし・生業・伝承と次の災害に向けて「これから」を論じました。報告書には333人のそれぞれの当事者の復興の声「何を考え、何をしようと試みたのか」をまとめ、アーカイブとしての蓄積を図りました。

2017年には「計画・制度とそこから<sup>こぼ</sup>零れ落ちるもの」をテーマに、弁護士会をはじめ土業13団体が加わり、ハードが先行し話題となりやすいなか、「零れ落ちるもの」と「そこからの解決」に焦点を当てました。弁護士会の活動から、報道からは見えない在宅被災者など「隠れた被災者」と求められる支援があぶり出されました。



「みやぎボイス2018」  
フライヤーの表面と裏面

## みやぎボイス2018

今年9月2日には、第6回となるみやぎボイス2018「次の社会の在り方につなげる試み」が開催されました。日本建築学会東北大会に合わせて、これまでのみやぎボイス連絡協議会（構成団体はJIA宮城、みやぎ連携復興センター、東北圏地域づくりコンソーシアム、宮城県災害復興支援土業連絡会、宮城県サポートセンター支援事務所）と建築学会の共催となり、プラットフォームがさらに拡大しました。その結果、3テーブル×3ラウンド計9テーブルで、広範囲なテーマについて論じ合うことができました。

私たち自身の課題として、「若者の参画」「専門家の役割と能力」「整備する空間の価値」の大切さをあらためて確認しました。福島のテーブルでは、原子力災害の責任が見え難い中、これまでの「情報・判断・行動」の知見では応えきれない現場での、真摯に「それぞれの復興」に向かう一人ひとりの取り組みが、九州のテーブルでは、繰り返される「初期行動」での混乱が話し合われました。ここでも「顔の見える人と知見のプラットフォーム」の価値が確認されました。

共通しているのは「意思決定のプロセス」と事業成果との関係です。次に向けて成果と課題の検証が必要です。なぜなら、今までの経験と知見が次の社会をつくっていくからです。

## みやぎボイスの課題

みやぎボイスの企画運営は、初期はJIA宮城が中心的に担ってきましたが、プラットフォームが拡大されるにつれ協議会での協働へと変わっていきました。最大の課題は財政基盤です。シンポジウム開催に対しては共催団体からの拠出金と報告書売上と寄付金、2016年からは「新しい東北」からの助成を受けています。会場費、登壇者の宿泊交通費、事務局経費、報告書印刷・発送が主な支出で、それ以外は協議会とJIA宮城と東北支部協会の無償の支援によって実現してきました。みやぎボイスのようなプラットフォームでの活動は、モノ・コト・カネによる直後の支援とは異なり、財政基盤が脆弱です。来年以降の継続については新たな財政基盤の構築が避けられません。

厳しい状況の中、建築まちづくりでの「連携と協働のプラットフォーム」と「経験と知見のアーカイブ」を活動の目標としたこれまでのみやぎボイスの手応えが、私たちを動かす大きな力となっています。

復興と建築まちづくりは地域ごとに違います。普段から継続的なそれぞれの「地域経営の視点と活動」が大切です。制度や前例では応えきれない「隙間を埋め」「一人ひとりの特徴を知りそれに応える」ために、戦後70年の成功体験に固執しない、互いの「顔」を知り、地域社会の「全体像」を共有し「読解力」を高める“場”として、プラットフォームのひとつのカタチ「みやぎボイス」が寄与できると確信しています。



報告書『みやぎボイス』購入による支援をお願いします。  
詳しくは、JIA東北支部HP-宮城地域会ブログをご覧ください。

## みやぎボイスの成果

「みやぎボイス」のプラットフォームでの活動は、JIAの建築家の社会化・地域化、さらに連携・協働の深く広範囲な展開と、そして何より私たち自身の成長に繋がったと実感しています。6回目の「みやぎボイス」を終え、改めて継続と期待への声を多数いただきました。

これまでのJIAと会員の皆様のご支援に感謝し、今後の変わらないご支援をお願いいたします。

—私たちは自問します。“わたしは何を残しただろう。”